第２１０号

芥川だより

発行日＊２０２４年７月１日　e-mail: ab_879686240@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集　　川口　伸
発行 人　　下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796－8624

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部２００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊

平和と戦争の言葉が同一化してきた

言葉が本来持っていたはずの意味が、今ほど薄れてしまい表現自体が曖昧になった時はないのではないかと危惧する。その一例が、平和と戦争という言葉だ。この言葉ほど人間の都合の良い欲望を表現している言葉はない。戦争と平和は複雑に関係し表現する人によって如何様にも本来の欲望や悪行を覆いかぶせる魔法のようなベールになる。

そもそも、この世の中の現象を区別することはできない。ただ一瞬、特定の視点から考え表現することが出来るだけである。その表現者の心境によって戦争にも平和にもなるのだ。戦争や平和を定義することは、意味をもたない。個人的すぎる心境をあれこれ言うのは非社会的だと思う。

グローバル化した資本主義社会は、常に利潤を追求し続けなければいけない。インフレなくして社会を維持することはできない。なぜか、借金社会であってインフレにより借金を減らす。不景気が続き金詰りになれば戦争だ。戦争ほど都合の良いシステムはない。反対に平和は都合が悪い。

戦争のない平等で平和な社会、とよく聞くが、そんな社会は発展性のない退屈な社会である。常にどこかに戦争が起きており、砲弾が飛び交い人々が死に街が破壊される。見た目には悲惨だが、戦争が終われば復興という大きなプロジェクトが待っている。金儲けの機会が待っている。戦争と一瞬の平和は人間の歴史を繰り返し繰り返し作ってきた。

人々が戦争反対という時には、すでに戦争は計画され準備される。戦争が始まれば平和を叫び復興支援というでっち上げで金を稼ぐ。つまり、われわれは戦争のために黙々と働き、良心に平和というベールを覆って生きている。救いがたい今の社会を少しでもまともなものにするには、ベールを取り現実を直視できる勇気ある行動だ。

死をめぐるあれやこれ（１１５）　石川　吾郎

彗星の思い出

齢を重ねるとどうしても昔を思い出す。今回は私の夢・幻のような体験を書き残しておきたい。私は昔天文少年だった。岐阜市の実家で、望遠鏡でよく空を覗いたものだ。しかし、受験勉強で視力を悪くしてやがて遠ざかっていった。◆一九七〇年三月下旬、私は京都の大学に合格した。しばらく解放感にひたって朝寝したり、徹夜で好きな小説を読んだりしていた。『ボヴァリー夫人』か何かだったと思う。◆その日も一晩読書をして疲れ、未明にふと東の窓を開けて空をみた。まだ夜が明けぬ暗い空に見たことのない世界が拡がっていた。薄明るい淡い光が東の山の端から、頭上にいたるまで流れていたのだった。直感した。これは彗星だと。よく見ると山の近くの頭部から流れるジェットのようなものが幾筋もでて、頭上の近くではそれが繊細なレェスのように拡がっているのが肉眼で見える。空の六十度ほども占めているようだ。思わずしばし見とれていたが、我にかえって写真を取ろうと自宅の屋根の上に出てカメラをセットするのに手間取っているうちに、東の空は白々と明けてきて、たちまち彗星の姿は朝焼けの中に消えてしまった。◆私は生涯で二度、大きな彗星を見る機会があった。一つは、六五年の池谷・関彗星だった。中学生だった私はこの彗星の写真を父のカメラで撮影した。そして不意に出会ったこの彗星は、今調べてみると私の夢・幻では

なく、七十年三月二六日に地球に最接近をしたベネット彗星であった。そして奇跡的に私が見たのは、おそらく三月二七日の未明であったろうと思う。しかし不思議なことにニュースなどでは全く取り上げられていなかった。◆その後であった、私にとって疾風怒濤の青春の季節がはじまったのは。

芥川だより二一〇号　目次　ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム１１５	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳　１２４	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談74	祖蔵哲	3
大峰奥駆道80	下村嘉明	6
ボケ老人の雑話　その3	明石幸次郎	6
オクラの山たより94	因了生	7
隠された歴史69	満田正賢	9
俳句	影山武司	11
編集後記	ＳＫ生	11
ふみの道草73	山椒魚	12

素老人☆よもだ帳（１２４）

坂本 一光

◆稲作挿話（宮沢賢治）と声援（武田鉄矢）

先日、たまたま海援隊の５０周年記念コンサートがＢＳ松竹東急で放送されているのを観た。いつもながらに鉄矢の喋りが聞かせる。ある時、コンサートの最前列にいた若者がこんなことを言ったという。

「武田さん、武田さん。面白い話もいいんですが、普通の話もして下さい」

「普通の話って何ですか」

「金八先生みたいな話です」

「そう言われて。宮沢賢治の『稲作挿話』という詩を紹介しました。農業指導をしていた賢治は、学校帰りに、教え子たちの田んぼを回ってこんな話をしていたんですね」

稲作挿話　　宮沢賢治

あすこの田はねえ
あの種類では窒素があんまり多過ぎるから
もうきっぱりと灌水（みず）を切ってね
三番除草はしないんだ
…一しんに畔を走って来て
　青田のなかに汗拭くその子…
燐酸がまだ残っていない？
みんな使った？
それではもしこの天候が
これから五日続いたら
あの枝垂れ葉をねえ
斯ういう風な枝垂れ葉をねえ
むしってとってしまうんだ
…せわしくうなづき汗拭くその子
　冬講習に来たときは
　一年はたらいたあととは云え
　まだかがやかな苹果（へいか＝りんご）のわらいをもっていた
　いまはもう日と汗に焼け
　幾夜の不眠にやつれている…
それからいいかい
今月末にあの稲が
君の胸より延びたらねえ
ちょうどシャツの上のぼたんを定規にしてねえ
葉尖を刈ってしまうんだ
…汗だけでない
　泪も拭いているんだな…
君が自分でかんがえた
あの田もすっかり見て来たよ
陸羽一三二號のほうはね
あれはずいぶん上手に行った
肥えも少しもむらがないし
いかにも強く育っている
硫安だってきみが自分で播いたろう
みんながいろいろ云うだろうが
あっちは少しも心配ない
反当三石二斗なら
もうきまったと云っていい
しっかりやるんだよ
これからの本当の勉強はねえ
テニスをしながら商売の先生から
義理で教わることでないんだ
きみのようにさ
吹雪やわずかの仕事のひまで
泣きながら
からだに刻んで行く勉強が
まもなくぐんぐん強い芽を噴いて
どこまでのびるかわからない
それがこれからのあたらしい学問の
はじまりなんだ
ではさようなら
…雲からも風からも
　透明な力が
　そのこどもに
　うつれ…

こんな語りに続いて歌ったのは、『声援』という歌だった。老農民夫婦の姿を見て作った歌だという。

声援　　海援隊

貴方が言葉を覚えたのは
悲しみ語るためですか
どうか何度も泣いてください
うれし涙に出会うまでは
春の陽射しを見つけるまで
だれもが寒い旅人なんです
涙で汚れた貴方の顔に
僕は声援送ります
がんばれ がんばれ 頼む

がんばれ がんばってくれ
がんばれ がんばれ 頼む
がんばれ がんばってくれ

大地耕す人の手が
泥にまみれている様に
心も働けば汚れるものさ
人を愛したり憎んだり
笑顔ばかりで生きてる人は
怠け者だと気付いてくれ
手探りしながら生きてる貴方に 僕は
声援送ります
がんばれ がんばれ 頼む
がんばれ がんばってくれ
がんばれ がんばれ 頼む
がんばれ がんばってくれ

夢をめざして走り出す時
みんな寂しいマラソンランナー
声をからして貴方の背中に
僕は声援送ります
がんばれ がんばれ 頼む
がんばれ がんばってくれ
がんばれ がんばれ 頼む
がんばれ がんばってくれ

鉄矢も賢治と同じように、やっぱり教師だったのかもしれないなあとしきりに思ったことである。
（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

「哲学爺い」の時事放談（７４）

祖蔵　哲

「極左、極右」の哲学

２０２４年は選挙イヤーであると年初に書いたが、すでに1月台湾総統選、３月ロシア大統領選、４月韓国総選挙、５月インド総選挙、そして先月６月にはEU 議会選挙が行われた。それぞれに異変が起きている。世界の注目は11月のアメリカ大統領選挙であろう。すべて予測不能、そして右傾化や揺れ戻しに特徴がある。日本でも今月7月7日の東京都知事選は異様である。立候補者が５６人になり、用意された選挙ポスター掲示板４８枠を超えたのである。選挙が売名行為や宣伝の道具となり、本来の政治からかけ離れ、関心は別のところにある。これらの傾向は世界でも見られる。６月のＥＵ議会選挙でフランス代表議員を極右派が多くを占めた。これを機にマクロン大統領は自国の国民議会を解散して起死回生を狙ったが、第一段階の選挙結果は大敗した。この7日に最終結果が出るがどうも不利は変わりない。フランスでなぜ極右政党が支持されるのか。それはアメリカと同じ状況である。グローバル化によって取り残された人々は経済停滞と移民問題である。さらに長期化するウクライナ問題に対する対応はこれらの人々を自国中心主義に向かわせる。

ウクライナの問題が長期化していると同時に、イスラエル・ガザ戦争も泥沼化している。世界はこの戦争も不条理であると認識しながら止められない現実がある。世界はますます内向き、自国中心主義になっていくのであろうか。しかし、世界ではこれらに抵抗する若者世代も少数ながら出てきている。かつて世界を動かしたこれらの学生達は再び歴史を前へ進められるのか。

（1）現代アメリカの学生運動

アメリカの主要大学ではイスラム組織ハマスがイスラエルに攻撃した昨年10月7日以来、イスラエルへのジェノサイド抗議活動はずっと続いている。この活動の中心になっているのは主に移民出身の大学生であると聞く。彼らは低所得層でありながら国の奨学金を自身の生活環境改善のため学んでいるのだ。一方で、アメリカの大学は企業からの寄付金で成り立っているところが多く、その中にはユダヤ系企業が多く含まれる。それらはこの抗議を「反ユダヤ主義」として非難している。イスラエル批判がすべて「反ユダヤ主義」か、どうかは疑わしいが。

しかし、この対立構造の緊迫が一気に高まったのは、今年4月、連邦議会で大学の状況を査問されたコロンビア大の学長が、学生たちの言動が、ユダヤ人に対する差別や攻撃を助長する「反ユダヤ主義」だと認めてしまったからだ。「反ユダヤ主義」は「ナチズム」を意味し西欧ではタブー視されている。この後、大学当局が「不法占拠」を理由に警察に通報し１５０人以上の学生が逮捕された。これをきっかけに、抗議行動が全米の大学に爆発的に広がった。学生たちはキャンパスに野営地を張って座り込んだり、ハンガーストライキをしたりという形で、非暴力的抗議活動を行っているが、それを封じ込めるのは暴力的警察権力である。これらに対して大学では、学生だけではなく教員、職員たちも抗議に参加している。彼らは、「平和的な抗議活動を鎮圧するためにキャンパス内に警官や武装した機動隊を出動させ、丸腰の学生たちを逮捕するのは、学問の自由、言論の自由に反する上、大学という研究機関の自治・独立を侵食するものだ」と主張する。

しかし、現代のアメリカにおけるこのような学生運動に対して一般大衆の意見は冷淡である。運動は全米の学生の一部にすぎず、少数派とされている。だが、過去のアメリカでは１９６０年代以降、多くの学生にとって過激な行動は「通過儀礼」となってきた歴史がある。当時のアメリカは東西冷戦時代にあり、その代理戦争ともいうべきベトナム戦争にアメリカは深く介入し、学生は徴兵されるという個人的危機感もあったからだ。さらに高度に発達した資本主義の矛盾が突発し資本主義グローバル化、環境問題、化石燃料への投資削減など、時代と共に異

なる問題に学生は反発してきた。

（3）日本の学生運動の変遷

現在、日本での学生運動は低調である。首都圏の大学では小規模ながらパレスチナ支援イスラエルへの抗議の集会がもたれているようだが、4月の東京大学での学費値上げ反対抗議行動でのトラブルに学校当局がすぐに警察を導入に排除した後、大きなうねりにはなっていない。近年の日本の学生運動は「グループ型」から「ネットワーク型」への変質がみられるという分析がある。インターネットでのの普及ＳＮＳを背景に、２０１５年の安保関連法制反対運動のころから見られるようになったもので、60年安保や70年前後の全共闘運動で見られてきたような、学生団体や組織がリードする形ではなくなっているようだ。一つの要因が新自由主義政策の一環である国立大学法人化、大学の株式会社化である。公共の予算を削減して大学自体が経営をする。つまり、儲かること、経済合理性だけを学問の対象にする教育資本主義である。これにより、大学と企業の結びつきは促進され、その企業に役立つ研究費のみが寄付金として大学に援助される。大学の自治活動費は削減され、社会改革や戦争反対などは一切不要のものとして排除されるのである。

日本で学生運動が最も盛り上がりを見せたのは、１９６０年の安保闘争、１９６８年から１９７０年の全共闘運動・大学紛争の時期であったが、それ以降は下火となっている。高度成長期の頂点で社会が豊かになったことでの政治離れが起こり、内ゲバなど過激な運動への忌避感が生じた。さらに社会主義国の実態認知、ノンポリ多数派学生からの学生運動家への嫌悪などにより、運動が停滞化した。高度成長期が過ぎ経済が停滞すると、高騰する学費と「闇金融」とまで揶揄された奨学金の利子の高さのためにその返済に追われる学生は自身の就職活動やアルバイトに本腰を入れざるを得なくなり、いつしか学生運動をする余裕すら主流派の学生達は失ってしまったのである。

（4）学生運動前史～戦後の冷戦時代

戦後政治の大きな流れは東西冷戦構造に始まる。第二次世界大戦は自由主義と全体主義の戦いであったが、その底辺には資本主義と共産主義の対立が隠されていた。

イギリスの首相チャーチルは訪米中の１９４６年に「鉄のカーテン」演説をおこない、ソ連の東欧諸国囲い込みを批判し、自由主義陣営の結束を呼びかけていた。１９４８年米英仏そしてソ連の４ヵ国による分割占領下にあった戦後ドイツでは、西側での通貨改革強行に対して反発したソ連が6月ベルリン封鎖に踏み切ったときから4国管理理事会は機能しなくなり、ドイツの東西分裂が事実上確定した。この「ベルリン封鎖」以降、東西対構造の言葉として「冷戦」は定着してきた。

一方、アジアにおいて、１９４９年に共産党政権である中華人民共和国が成立したことは、東西冷戦構造を東アジアに拡張させ、対立を深刻化させることになった。中国とソ連は中ソ友好同盟相互援助条約を締結した。そして１９５０年から三年間の朝鮮戦争。ソ連の正式な参戦はなかったが、アメリカと中国が参戦し、事実上両陣営の直接対立となった。

その中で日本は１９５１年サンフランシスコ講和会議で主権を回復するとともに日米安全保障条約を締結してアメリカとの軍事同盟を作り上げ再軍備を開始したが、東アジアにおいては対中国、北朝鮮へのアメリカ追従の西側諸国同盟に編入されていった。

１９５６年ソ連においてスターリン批判がおこなわれ、国内での「雪どけ」とともに外交政策は平和共存に転換した。この後、東西の対立状況は改善されると思われていたが、逆に対立が潜在化し、それは代理戦争となって表面に現れてきた。１９６２年のキューバ危機は、核戦争の一歩手前までいった。また、朝鮮半島の分断と同じくインドシナ半島でのベトナムの独立は、共産化への危機感から１９６５年アメリカが本格介入し、ベトナム戦争は泥沼化していく。これが学生運動開始の歴史に繋がるのである。

（5）時代の転換点１９６８年と新左翼

１９６８年5月、フランス、パリ大学でド＝ゴール政権の教育政策に反発し、さらに冷戦構造下での硬直した既成左翼に不満を抱く「新左翼」の学生による大学占拠事件が発生した。学生らはパリ市内の学生街カルチェ＝ラタンに結集し、警官隊と衝突した。バリケードが築かれ「解放区」が出現、政府は共和国保安隊を出動させて鎮圧にあたった。これが学生運動の原点「五月革命」である。

政権ははじめ、「子供の遊びさ」と楽観していたが、ようやく国民議会を解散して総選挙を行うことを宣言し、事態の収拾にあたった。政府も労組に対して賃上げを約束するなどして運動を懐柔し、6月には平静を取り戻した。この後行われた総選挙では暴動への反動からド＝ゴール派が圧勝し、政権崩壊の危機は去った。しかし、この学生の行動は「新左翼」というムーブメントを世界に広げる契機となったのである。

この時代、ベビーブーム期の多くの大学生が進学したが、急造の大学施設は貧弱で、また超エリート校と一般の大学の格差も依然として大きく、学生の多くは社会への反発を強めていた。この１９６８年という年はベトナム反戦運動の盛り上がりと結びついた学生運動が世界的な広がりを見せ、第二次世界大戦後の経済発展至上主義の社会が大きな曲がり角に

入ってきたことを思わせる動きのあった年でもあった。

（6）ニューレフトとポストモダン

いわゆる「新左翼」とは既成左翼に対するアンチテーゼとして生まれた。その契機は１９５６年のスターリン批判と反ソ連ハンガリー革命である。ロシア革命から始まる国際共産主義運動、つまり本流「ソ連」による革命の輸出に対しての左翼体制内での反発である。

日本では１９５７年に日本トロツキスト連盟が結成され，それが母体となって革命的共産主義者同盟（革共同）が生れ，５８年には日本共産党の学生細胞を中心とした共産主義者同盟（共産同）が結成された。いずれも既成権威からの反発から生まれている。

しかし、先の１９６８年の「五月革命」の挫折以後、党派的対立やテロリズム戦略の過激化から一般の支持を失った。日本でも６０年安保闘争をけん引した共産主義者同盟から分派した赤軍派が起こした１９７０年のよど号ハイジャック事件、１９７２年の連合赤軍あさま山荘事件などが起きている。

新左翼、ニューレフトとは先ほど述べたとおり、反資本主義であると同時に既成左翼思想への反発でもある。マルクス・レーニン主義の本流共産主義の思想は、高度に資本主義が発達すればその自己矛盾により共産主義の世の中に必然的になる「必然的歴史観」に基づいたものである。その歴史観を否定するのが新左翼である。それは哲学の流れでいうと「ポストモダン」に該当する。

ポストモダンとは文字通り「脱近代」であり、近代主義である「大きな物語」つまり資本主義であれ共産主義であれ、「絶対的歴史観」を拒否する。また、啓蒙主義的、理性主義を批判し政治的、経済的なあらゆる権力の維持におけるイデオロギーを批判する。その思想は相対主義、多元主義になり個別化、多様化に向かう。その行動はまず既成事実の破壊から始まる。それは必然的に暴力をともない、そしてアナキーにもつながる。

（7）ナショナリズムに向かう「極右」

学生運動が「極左」に結びつきやすい理由は、先ほど述べた、その思想にある。既成事実、権力に対する反抗は若者世代の特権でありエネルギー源である。その方向は反権力、無政府主義的な外向きの力になる。

これに対して「極右」は逆の方向を目指す。「内向き」であり保守的、権威主義的、排他的、国家主義的、ナショナリズム、「自国第一主義」である。自由主義の先進国とみられるアメリカでさえ「極右」のトランプ現象が吹き荒れている。さらに、冒頭で現状を報告したように、自由の国の元祖フランスでも極右政党の台頭が著しい。なんと最近行われた「反ユダヤ」抗議デモに極右政党「国民戦線」のマリーヌ・ル・ペン氏が参加したのだ。「反ユダヤ主義」はナチ政権の政策であり、過去においては「右派政党」の特徴でもあった。それを自ら否定することは、かつては考えられなかった。

少し複雑であるが、「反ユダヤ主義」抗議とは、結果的にはイスラエル支持を意味する。今、中東で起きているイスラエル-ガザ戦争での「親パレスチナ」は「反イスラエル」＝「反ユダヤ主義」となり、かつてのナチズムに繋がるということから「反ユダヤ主義」抗議運動が起きている。結果的にはこれはイスラエルを支援するものだが、その理由が欧米ではタブーとされる「反ユダヤ」を利用している。欧米ではムスリムとともにユダヤ人へのヘイトが増えている。この状況で、これまで移民反対を掲げてきた多くの極右政党は「ユダヤ人差別反対」も鮮明に打ち出している。その理由には「共通の敵はイスラーム」というイメージ化に加えて、イスラエルの占領政策が極右にとって一種の理想形であることがあげられる。これまで人種差別的とみなされてきた欧米の極右は、今や熱心にユダヤ人差別反対を叫んでいる。もっとも、それは反ヘイトに舵を切ったというより、異人種・異教徒との共存を否定する論理の裏返しであるのだ。「極右」の本質は排他的ナショナリズムである。

さて、今月は政治思想としての「右翼と左翼」を哲学した。哲学思想史的にはどちらも産業革命以来の「近代以降」が分岐点となる。そしてそれは「民族」や「国家」という「共同体」をめぐる生存への思想の方向として形成された。「右―左」の対立線は「内―外」「過去―未来」「固定―変化」という時間―空間軸の上に形成される。そこに人間の「歴史」が生まれる。未来を象徴する「若者世代」は果たしてどの方向を選択するのであろうか。

大峯奥駈道（８０）

下村　嘉明

体験型人間学　３０

先週、現場で事故が起こり、二人が負傷した。ひとりは、軽症であったが、もう一人は重傷であった。原因は、ビル風で突風が起きたことだった。

現場には、危険はいつも身近にある。施工業者は、作業員に日々、安全指導を行ってはいるが、現場を見ていると危な

いと思える光景を目にする。特に、足場組立や解体の際には、特別の注意が必要だ。

最近、私は何かトラブルが起きた現場へ行かされることが多い。警備員の遅刻や、指示に従わないので注意したら帰ってしまったなど、警備員に問題があったケースばかりだ。ところが、現場に行き、警備の責任者に話を聞くと、会社の無責任な採用方法が問題だと感じる。年齢的、体力的など一見すれば、無理だろうなと見られる人を採用して、現場での教育にしても少ない講習で現場に出すから、現場の職長はたまらない。

もう少し、まともな教育を受けさせて現場に送り出してくれれば、助かるのだが、そうはならない。現場で働いている新人を見ていると、不慣れで怒られているばかりなのだが、しかし多くの作業員と警備員とでは働く場所で少し違う点がある。作業員たちは、わりと近くで一緒に働き、注意や指導がしやすいが、警備員は離れた場所に配置されるので最初から独りであるから、まったく素人が立っているケースが多い。休憩時間や昼食時間も別々である場合も多い。

職長もみんなと同じように決められた場所でいなければならず、新人への指導する時間も余裕もない。この時期に多くの新人は辞めていく。もちろん仕事の面白さも少しも分からず辞めていく。体力的にも改善できることは多い。工事によって多少の違いはあるが、朝８時に集合し、８時半から朝礼、９時から作業開始、１０時から３０分休憩、１２時から１時間昼休み、３時から３０分休憩、５時半に終了。

ボケ老人の雑記（その３）

明石　幸次郎

先日の読売新聞朝刊の社会面の「人生案内」（読者からの悩み事に対して回答者が助言する）に７０歳前半の男性歯科医からの相談が載っていました。それは、自分が長くやっていた歯科医院を、最近息子夫婦が継ぐようになり、ほぼ、医院を二人に任せて、自分は自宅にいる時間が増えている。しかし、家では何もすることがない、このままで人生を送るのかと思うと虚しくなる。これからの人生をどう送ればよいのか？という悩みでありました。

回答者（女流作家）は、一言でいえば、生活者としての色々な知識を身に着けて、働いていた時とは違う家庭、社会での役割を見出し、それで地に着いた生活を送ることで、今後の人生を豊かに送ることに繋がるのではと回答していました。

自分達と同じような年代で、医師であっても仕事を終えれば、サラリーマンの定年と同じで、第２の人生は、今までとは違い、何をするにも自分で見つけ、それを自分なりの楽しみと、家族への奉仕により価値あるものとしていかないと、人生１００年、７０歳からの人生を受け身で何もしないで退屈に送るとすれば時間は長くしんどいですし、むなしいですね。

これまでは、男性は社会に出て仕事をして稼いでくれれば、家庭に戻ると、家人がめし、酒、風呂、ベッドと文句を言われずに提供？してくれていたかも知れないが、稼ぐという役割を終えた男性は、家庭で何もしないと、しゃべる、そして老いた、かわいくもないペット？のごとき存在になり果ててしまいかねません。

私は、これまで何十人もの女性から聞きましたが、女性が嫌がるのは、働いていない旦那に三度三度の食事を作ることです。（子供は別のようです）何か予定があり出掛けようとすると「俺の飯は？何時頃戻る？」など言われ、常に家事をしなければならないとか、家、旦那に拘束されることとかであります。

働き終えた男が第２の人生を、崇高な人生の目的を見つけようと、ウジウジしていても、生きている限り生活を送らねばなりません。仕事と家事をこなしている女流作家からすれば、まず、生活者であることに目覚めなさいと、そして生活者としての技術を学びなさい。それは、日々、健康的な生活を送るために必要とされる料理、かたづける、掃除、ごみを出す、風呂掃除、庭の水撒き、手入れ、家族の世話、近所との付き合いなど細々とした家事と称している行為ですよ。

７０代以上の男性は大抵働いている時は、専業主婦である女性と役割分担のような形でこれら家事、育児などの大部分は女性に任せ、やってもらっていたので、いざ自分でやるとなると中々やりこなせないし、面倒くさい行為であります。女性から言わせば、男は面倒くさい細々とした家事を女性に押し付け、自分たちは仕事と称して会社の外でも、毎晩のように遊んでいたのではないかと内心思っているようであります。

この際、男は覚悟して、家人に教えを乞うて、三度三度の食事、買い物、掃除、かたづけ、ペットの世話、ごみ出しなどの家事を自主的にやることで、家庭での生活者としての存在を高め、何よりも、家人との関係を円満に保つ事で、第２の人生が穏やかなものになると共に、男が生活者として自立することに繋がっていくと思います。

いずれは、第２の人生では、どちらかが先に逝ってしまうので、自立していない男は家人に先立たれると、しょぼくれ老人プラス、ボケ老人に化してしまいが

ちであります。女は反対で、より、残りの人生を楽しもうと元気なばあさんになります。これは、わたしの周りでの身近なケースが何例もありますので間違いはありません。

オクラの山たより（９４）

困了生

一

以前にも紹介しましたように小林一茶は大道芸人など貧窮にあえぎ人々から差別的な視線を浴びる社会的弱者の存在を無視することできませんでした。

その好例が「節季候（せきぞろ）」です。年末から新年にかけて、二～三人一組で、笠に歯朶（しだ）を挿して赤い絹で顔を覆い特異な服装をして家々の門前で「せきぞろござれや」などと囃しながら歌って踊り、新春の祝いごとを述べて米や銭を乞い歩くのが「節季候」でした。この節季候に一茶は強い関心をもっていました。寒さの厳しい歳末という短い期間だけが稼ぎ時というあわただしい行動をする節季候に強い視線を注いでいました。たとえば次の句です。

① 節季候に負けぬや門のむら雀

一八二〇（文政三）年

この句は芭蕉晩年の次の句を意識したものでしょう。

・ 節季候の雀の笑ふ出立（でたち）かな

一六九二（元禄五）年

「出立」は「装い、身なり」のこと。雀が盛んにさえずって節季候の異様な身なりを笑っているという芭蕉の句ですが、この句と門でさえずる群れ雀よ、節季候が歌い踊る声に負けるなよ、という一茶の句を比べると二人の俳人の節季候への見方の相違がよく分かります。芭蕉の句には節季候が雀にも笑われる非人身分の仕事をしているという差別感が漂っていますが、一茶の句にはほとんどそれを感じません。一茶の節季候の句をもう少しあげれば

② 節季候や七尺去つて小節季候

一八一二（文化九）年

節季候がやってきた、その七尺（２メートル）ほど後ろには子供の節季候がついてきている、という句意です。親子連れの節季候なのでしょう。慣れない物乞いに恥ずかしさを感じながらも無邪気に物乞いをする子供の姿が目に浮かんできます。そして、見えてくるのは社会の底辺にありながら懸命に生きようとしている人々への一茶の限りない共感です。

そして、一茶の二万を超える句を読んでいって驚くのは次のような句が出てくるのが、けっしてまれではないことです。

③ 穢多町に見落とされたる 幟哉（のぼりかな）

一八〇三（享和三）年

④ 穢多（えた）町も夜はうつくしき 砧哉（きぬたかな）

一八〇四（文化元）年

⑤ ゑた寺の桜まじまじ咲きにけり

一八一〇（文化七）年

⑥ ゑた村の御講幟やお霜月

一八二〇（文政三）年

見聞きしたもので心に映じたものを俗語も交えた句にしていった一茶ですから、こういった句もあるのは当然のことでしょう。江戸時代後期には「穢多」と呼ばれていた人々への差別が厳しさを増していく時代でした。そうした時代にあっても先ほどの「節季候」と同じく弱者の立場に立ってそこに暖かな眼を注ぎつつ句を詠んでいます。

③の句は「穢多町」にも男の子の健やかな成長を願った端午の節句を祝う「幟」がひるがえっている情景を詠んでいます。男の子への気持ちのこもった「幟」をまともに見ようとはせず「見落と」しているのは穢多町の外に住む人々。狭い差別意識にとらわれた人々を皮肉った句にも見えます。

④の句で「砧」は布にツヤを出すために木や石の上に布をのせて木の槌で叩くことです。秋の静かな夜に穢多町から砧を打つ音がトントンと聞こえてきます。ふだんは嫌われている町も、こんなにも平和で美しいではないかという一茶のやさしい気持ちが感じられる句です。

⑤の句で「まじまじ」は「堂々と、立派に」という意味です。穢多寺とは被差別部落を檀家とする寺です。穢多寺の桜も他の寺の桜とまったく同じく堂々と咲いているではないか、という一茶の声が聞こえてきそうです。この句には人間の世界にある醜い差別を嘆き、自然界の平等さをたたえようとする一茶の主張がみえます。

⑥の句で「御講」とは親鸞聖人の忌日を中心とした奉恩講のことを言っています。寒さがグンと増してくる旧暦十一月、ゑた村に親鸞聖人の法事が行われることを知らせる幟が高々と掲げられています。「身分が低く卑しいといわれている人々や罪深い人々こそ、本願を信じ念仏することにより救われる」と説く親鸞の教えは被差別部落の人々をはじめとして社会の下積みの人々に希望の光を与えるものでした。一茶も熱心な浄土真宗の信

者でした。

③から⑥の句を見れば一茶の視線が社会の下層に生きる人々のかなりの所まで及んでいるのが分かります。四十一歳から六十歳まで年齢にかかわらず被差別部落に生きる人たちの句を詠んでいることからも、一茶が差別された身分の人々の世界をいつも気にかけていたことがわかります。

とはいえ③から⑥の句に詠まれた光景には一茶なりの差別意識が感じ取れないこともありません。まぎれもなく一茶も江戸時代後期の空気の中で生きた人であったのです。町外れで暮らすしかなかった「ゑた」と呼ばれた人たちは貧しい生活を強いられていました。それは一見すればわかったでしょう。しかし、自然の営みはそんな所にも平等に息づいているのだ、と詠むあたりが一茶らしいといえます。そしてそんな世界にも子供の健やかな成長願って高く掲げられた鯉のぼりが勢いよく泳いでいます。夜ともなれば布をやわらげ艶出しをするために布を打つ美しい砧の音が聞こえてきます。こうしたどこの町にもある暮しの光景に一茶の心は安らいだことでしょう。

一茶の目線は低い。地べたを這うような低い目線から上の世界を見上げると、時に滑稽に見えることがあります。すでに紹介したことですが、政治的に社会的に地位の高い大名や坊主らのちょっとした動きに滑稽味を感じて句に詠むことがしばしばありました。たとえば次の句です。いずれも解釈は不要でしょう。

⑦ **僧正が野糞遊ばす日傘かな**

一八〇四（文化元）年

⑧ **ずぶ濡れの大名を見る炬燵かな**

一八二〇（文政三）年

⑨ **大名を馬から下ろす桜かな**

一八二四（文政七）年

⑩ **僧正の頭の上や蠅つるむ**

一八二五（文政八）年

これらの句にあるのは一茶の権力や権威に対する反骨精神です。大名や僧正という権力や権威に対する恐れと畏敬の念が崩れ落ちたとき、それが嘲笑の対象となり、そして滑稽味のある句として詠まれることとなります。

たぶん下層の人々への慈愛の眼差しと権力・権威を笑い飛ばす気持ちとは一茶にあっては表裏一体のものであったのでしょう。

さて、蕪村と一茶の話題からそろそろ離れて次の話題へと移ろうと思います。時代は江戸時代後期から江戸時代末期へと飛びます。

二

小林一茶が火事で焼け残った土蔵の中で亡くなったのは一八二七（文政十）年十一月十九日でした。それから四半世紀後の一八五二（嘉永五）年、老中阿部正弘に命がけの駕籠訴（幕府の老中や奉行、または藩主の駕籠にすがり訴状を提出する直訴の一つ。江戸時代後期には一般的な訴訟方法として広まった）を決行した人物がいます。その人物は甲斐国山梨郡中萩原村の小前百姓の長男として生まれた樋口八左衛門（1802～1871）です。彼は明治の女性作家樋口一葉(1872～1896)の祖父にあたります。「小前百姓」とは大前百姓といわれた村役人層や名主層といった村を支配するような富裕な農民に対して中下層の農民のことで自分の土地を持たない小作人、無高の百姓をさしていました。ただし、八左衛門はそうした最下層の農民ではなく、村役人層の「大前百姓」のように特別の家格を持たないものの、自立した農民でした。

八左衛門は学問好きで漢詩、狂歌、俳句を学び、南喬という号を持ち、政治にも関心を持ち公文書や記録の写しを多く今に残しています。また、農耕のかたわら暇を見つけては土地の子どもたちに読み書きを教えたり、農民たちの手紙や文書の代筆を引き受けたりしていました。若い時分から同じ村の益田藤助（後に江戸幕府にあっては駿府城代よりも格上の陸軍奉行並となった真下専之丞）と親交があり、藤助が甲斐国八代郡石和代官所に詰めるようになってから、自分のところに持ち込まれる訴訟や掛け合いの扱人（あつかいにん＝代言人（今の弁護士）に近い立場の人のこと）を引き受けるようになりました。

三

樋口八左衛門が嘉永五年の駕籠訴を行ったそもそもの起こりは水飢饉による近隣の村との水利権をめぐる紛争でした。上流の村が一方的に畑を水田に変えて大量に用水路の水を使い始めたことにより同じ用水路の水を使う下流の村々には十分な水が来なくなりました。上流の村と下流の村との間で水利権をめぐる紛争が起きたのです。村役人はその訴訟のための資金を村のすべての農民に負担させようとしましたが、ふだんから困窮していた農民たちは村役人のいう訴訟に反対し話し合いでの解決を求める運動を起こします。樋口八左衛門はこのとき小前百姓一二〇人の総代となって村役人の非を訴える文書を代官所に出します。しかし、訴えを受けた代官は村支配のシステムが崩壊することを危惧して、この訴えに加わったすべての人を投獄するように命じます。困惑した八左衛門たちは江戸に出て老中阿部伊勢守正弘に駕籠訴を決行しました。幸いなことに訴状は老中の手に渡り、八左衛門たちは甲州に護送され、一、二ヶ月の入牢で釈放されました。その後、村役人と小前百姓間の争議は話し合いによって解決されました。

この事件の経過からも分かるように樋口八左衛門は学問もあり正義感も強く周囲の人たちからの信望も厚かった人物でした。当然のことながら、その活動ぶりから見て八左衛門自身も百姓の分に安んずることができない人でした。しかし、理由はともあれ投獄された経験を持つ彼は、その志向・野心を達成することはまず不可能でした。死を迎えるまでのおよそ二十年間を彼は失意の中で暮らすことになります。

この祖父の死後に生まれた樋口一葉は小説「にごりえ」の主人公お力（りき）が自分の祖父についての語る場面で「祖父は四角な字（漢字・漢文のこと）をば読んだ人でござんす。つまりは私のやうな気違ひで、世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められたとやら、ゆるされぬとかにて断食して死んださうに御座んす。・・・」と祖父八左衛門の面影をお力の祖父の姿にダブらせています。どこか不幸な影を父から聞かされた祖父の話から一葉は感じ取っていたのかもしれません。

一八五七（安政四）年旧暦四月六日、そうした父親の不遇を見てきた村一番の秀才であった長男の大吉が同じ村の出身で村一番の器量よしといわれた地主格の農家古屋安兵衛の娘あやめをともなって、無断で村を捨て江戸に向けて出奔しました。このときあやめは妊娠八ヶ月。山道を走り抜けるには厳しい身体状況でした。二人のせっぱ詰まった気持ちが想像できます。

どんなに学問があっても、どんなに人望があっても甲州の片田舎の一介の百姓ではこの先どうにもならぬ、と大吉は父親を見てつくづく思ったのでしょう。江戸へ出る決意をするには父親の「江戸へ出て友人の真下専之丞のように幕府の直参の侍になれ」という忠告もあったと思われます。

江戸に出た大吉が頼ったのは父親の友人であった真下専之丞です。このとき真下専之丞は蕃書調所調役勤番という役職にありました。蕃書調所は後の東京大学。今でいえば勤番はその事務職にあたるでしょう。大吉は十日ほど真下の家で世話になり、その後、江戸城の奥医師の喜多村法眼安正の手伝いで医学書の印刷に関わる仕事が見つかり小石川に一家を構え、江戸での生活を始めます。その後、八丁堀同心の株を買って幕府直参の武士となった大吉（のちに樋口則義と名前を改めた）とあやめ（のちに樋口たきと名前を改めた）の奮闘ぶり、そして、次女なつ（奈津、または夏子。樋口一葉のこと）の誕生までの話は次回にまわすことにします。

隠された歴史（６９）

満田　正賢

前回は、中国の史書である隋書に記載された倭（たい）王阿毎多利思北の中国への遣使記事、そしてそれに続く文林郎裴清の倭国への派遣記事と、日本書紀・推古紀に記載された小野妹子派遣記事、鴻臚寺掌客裴世清の来朝記事とが一致するかどうかという問題を探りました。その結果、二つの記事は阿毎多利思北が蘇我馬子であると考えればつじつまが合うという結論を出しました。それではなぜ、隋書の文林郎裴清が日本では鴻臚寺掌客裴世清として語られているのでしょうか。今回はそこに注目します。

私は、「隠された歴史（３６）」で、鴻臚寺掌客という官名は、裴世清の倭国遣使時の仮官ではないかという石暁軍氏の考察（石暁軍著『隋唐外務官僚の研究―鴻臚寺官僚・遣外使節を中心に』東方書店）を紹介しました。その後ずっと仮官説が正しいと考えていたのですが、古田史学の会会員の野田利郎氏が古田史学の会関西例会で「なぜ『隋書』は『裴清』と書いたのか―推古紀の遣唐使の疑問」というすばらしい発表をされました。

皆さんもお気付きのように、「裴世清」という名前が隋書では「裴清」と記されています。中国では天子の名前・諱（いみな）を使うのを避けるという風習があります。隋書が成立したのは唐の太宗（李世民）の時代ですので、諱である「世」の文字の使用を避けたが為に「裴世清」が「裴清」と記された、これが今まで常識とされてきた理解です。野田氏はこれに疑問を投げかけました。確かに隋書が成立したのは唐代ですが、その元資料は隋代に記されたものです。そして野田氏は隋書の多くの箇所に「韋世康」「王世積」「虞世基」など「世」の字をもつ人名が使われていることに注目しました。ではなぜ「裴世清」を「裴清」と記したのでしょうか。

裴世清の生涯の記録は断片的に残っています。唐代の書家である張旭が石柱に書いた『尚書省郎官石記』の主客郎中の箇所に「裴世清」の記載があり、『新唐書』巻七十一、上宰相世系表の裴氏のうち、中眷裴氏の条に「世清江州刺史」とあります。つまり裴世清は隋代だけでなく唐代も引き続き官吏として任用されています。隋代に記された隋書の元資料には、当然「世」の文字は諱として避けられてはいませんが、唐の太宗の時代においては「世」の文字は諱として避けられます。野田氏は、隋書に記された「文林郎裴清」という官名は、裴世清が唐代に賜った官名ではないか、その為に「世」の文字が諱として避けられていたのではないかと考察しました。つまり、隋代に倭国（倭国）に派遣された時の裴世清の官名は「鴻

臚寺掌客」であり、唐代になって「文林郎」となった。隋書の編者は、唐代の裴世清の呼び名「文林郎裴清」を間違って記載してしまった。これが野田氏が到達した仮説です。私はこの野田氏の考察はすばらしいと考えます。

この仮説によれば、隋書倭国伝の記事がより深く理解できます。隋書倭国伝の中の文章を読み下し文で紹介します。

「大業三年、その王、多利思北孤は使を遣はし朝貢す。使者曰はく。海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと聞く。故に、遣はして朝拝し、兼ねて沙門数十人来たりて仏法を学ばむとす。その国書曰く。日出ずる所の天子、書を日没する所の天子に致す。恙なきや、云々。帝は之を覧じて悦ばず。鴻臚卿に謂ひて曰はく、蛮夷の書、無礼有るは復以って聞する勿かれ。」

隋の煬帝は倭国の使者が持参した国書の文面を見て、外交部門をつかさどる鴻臚卿に対し、これは無礼な物言いであるから二度とこのような文書を書かせるなと指示しています。すなわち後の処置を鴻臚卿に任せているのです。鴻臚卿が倭国の遣使要請に対し、自分の部下である鴻臚寺掌客裴世清を派遣したという流れであれば、隋書の記事と日本書紀の記事はぴったりと合います。

さらにもう一つ理解が深まる点があります。日本書紀の推古紀十六年条に次のような記述があります。

爰天皇聘唐帝、其辭曰「東天皇敬白西皇帝。使人鴻臚寺掌客裴世清等至、久憶方解。季秋薄冷、尊何如、想清悆。此卽如常。今遣大禮蘇因高・大禮乎那利等往。謹白不具。」

有名な、「東の天皇謹んで西の皇帝に申し上げる」という文章です。これに対応する隋書倭国伝の中の最後の文章を読み下し文で紹介します。

「その後、清は人を遣りて、その王に謂ひて曰はく。朝命は既に達す。即ち戒塗を請ふ。ここに於いて、宴を設けて享し、以って清を遣はす。また使者を清に髄せしめ、来たりて方物を貢ぐ。この後、遂に絶ゆ。」

「清」とは裴世清のことです。「朝命は既に達す」とはどういう意味でしょうか。煬帝は「日出ずる所の天子、書を日没する所の天子に致す」という国書を見て、即ち夷蛮の国の王が中華の王と同等の「天子」という称号を用いていることに、烈火のごとく怒りました。そして鴻臚卿に、二度とこのような文書を書かせるなと指示しました。一方、日本書紀を見ると、裴世清に伝えた言葉は「東の天皇、西の皇帝」と名称を変えています。中華の天子は秦の始皇帝以降隋代まで「皇帝」と呼ばれています。「天皇」という名称は、当時の中国では「天皇」「地皇」「人皇」という道教系の神名の一つとして使われており、現世の天子・皇帝とは別の存在でした。裴世清は、倭（倭）国王の面目を保ちつつ、中国の王と同格ではないということを示す為の苦肉の策として「天皇」と「皇帝」という表現を使うことを倭（倭）国王に進言したのではないかと考えられます。その結果を鴻臚卿が煬帝に対して「朝命は既に達しました」と報告したと考えれば、日本書紀の文章と隋書の記事はぴったり合致しているのです。

ここまで野田氏の考察結果をご紹介しましたが、この結果としては、「推古天皇が蘇我馬子に代わるだけで、日本書紀の記すヤマト王権（近畿王朝）の一元支配の歴史は変わらないではないか」と思われる方が多いのではないでしょうか。私は、それに疑問を投げかけるのは倭国王という表現であり、鴻臚寺掌客（正九品下）という異常に低い官位の人物の派遣であると考えます。

隋書は「帝紀五巻」、「志三十巻」と「列伝五十巻」で構成されています。前回ご紹介したとおり、隋書の「帝紀三・煬帝上」には「大業四年、三月壬戌、百済、倭、赤土、迦羅舎国並遣使貢方物」「大業六年春正月己丑、倭国遣使貢方物」とあり、「倭国」という表記がされています。それにも関わらず、隋書・列伝・東夷の巻に載った記事は明確に「倭国」と表記されているのです。

一方、隋書倭国伝全体を眺めると、「倭国は百済、新羅の東南、水陸三千里の大海の中に在り。山島に依りて居す。魏の時、中国に訳通するは三十余国。みな王を自称す。」という、三国志魏志倭人伝の後に編纂された後漢書の文章の引用から始まっています。つまり、倭国とは歴史的に中国と交流のあった倭国のことであると明確に述べているのです。それにもかかわらず、倭国をあえて倭国と表記した理由を探らなければなりません。

古田史学の会事務局長の正木裕氏は、「倭・多利思北孤・鬼前・干食の由来」（『古代に真実を求めて』第十九集）において、「その倭国の王である多利思北孤が国書に『大倭』と署名してきたので、隋はこれを嫌い“弱々しい”という意味を含んだ“卑字”である『倭』を当てた可能性がある」と考察しています。この考察は的を射ているのではないかと思います。

又、「隠された歴史（３７）」で考察しましたが、鴻臚卿が、国の格付けとして、本来なら正四品の官吏を遣使するべき倭国に正九品下の鴻臚寺掌客を派遣したことも、夷蛮の国の王が中華の王と同等の「天子」という称号を用いたことに対する一種の懲罰である可能性もあると思います。

このような解釈で一応の説明は出来るのですが、もう一つの解釈も存在すると私は考えます。それは「隠された歴史（59）」でご紹介した、同じ野田利郎氏の『倭国伝と阿蘇山』という発表の内容に関係しています。倭国伝には次のような文章もあります。

「阿蘇山有り。その石、故無く火起こり、天に接す。俗は以って異と為し、因って祷祭を行う。如意宝珠有り。その色は青、大は鶏卵の如し、夜則ち光り有りて、魚の眼精なりと云う。新羅、百済はみな倭を以って大国、珍物多しと為し、並びに、これを敬仰し、恒に使を通じ往来す。」

従来、古田史学では「阿蘇山あり」という文面を根拠に、裴世清が訪問したのは近畿ではなく九州（筑紫）であるという見方をしていました。しかし野田氏は、この一連の文章は繋がっており、隋が朝鮮半島の諸国から見聞した話である、少なくとも「阿蘇山あり」という文面を根拠に裴世清が訪問した場所を特定することは出来ないと考察しました。

この考察は、その裏側に、朝鮮半島の諸国は倭国の中心地は阿蘇山の有る場所であると考えていることを示しています。ということは、隋は倭国を、九州を中心にした国であると知りながら、近畿にいる阿毎多利思北（蘇我馬子）を訪問した可能性が高いということになります。

煬帝、および鴻臚卿は、朝鮮諸国の話によって、倭王と名のった阿毎多利思北が正式な倭国の代表者ではないのではないかと感づいた。しかし、阿毎多利思北（蘇我馬子）からの法興寺（飛鳥寺）の創建儀式にぜひとも参加してほしいとの要請を受け、それを断ることをせず、鴻臚寺の中の最下級の官吏である鴻臚寺掌客裴世清を派遣し、阿毎多利思北を倭（たい）王という表記を用いてその裏にある隋の真意を表現した。

これは少々飛躍した推測にはなりますが、冒頭で

「倭国は百済、新羅の東南、水陸三千里の大海の中に在り。山島に依りて居す。魏の時、中国に訳通するは三十余国。みな王を自称す。」

という、三国志魏志倭人伝の後に編纂された後漢書の文章を引用し、

「阿蘇山有り。その石、故無く火起こり、天に接す。俗は以って異と為し、因って祷祭を行う。如意宝珠有り。その色は青、大は鶏卵の如し、夜則ち光り有りて、魚の眼精なりと云う。新羅、百済はみな倭を以って大国、珍物多しと為し、並びに、これを敬仰し、恒に使を通じ往来す。」

という朝鮮諸国から聞いた倭国の説明を終えた後、それに続いて

「大業三年、その王、多利思北孤は使を遣はし朝貢す。使者曰はく。海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと聞く。故に、遣はして朝拝し、兼ねて沙門数十人来たりて仏法を学ばむとす。その国書曰く。日出ずる所の天子、書を日没する所の天子に致す。恙なきや、云々。帝は之を覧じて悦ばず。鴻臚卿に謂ひて曰はく、蛮夷の書、無礼有るは復以って聞する勿かれ。」

という阿毎多利思北の遣使記事を載せた隋書倭国伝の全体構成からみて、あながち突拍子もない推測ではないと考えます。

奈良　秋篠寺　伎芸天

俳句

影山　武司

みづうみへ青葉若葉のなだれ入り
木道の先に鉄塔夏の富士
夏空を押し上げてゐる檜山
海風のはち切れさうなテントかな
泣き声もみな筒抜けの簾かな
朱の色のサマードレスやマチス展
幼子の背中で眠る螢の夜
夏椿零るる白の惜しみなく
ギヤマンの酒器青々と湛へをり
外つ国の切手空色パセリ噛む

編集後記

ＳＫ生

▲梅雨もそろそろ明ける時期になってきている。鬱陶しい時期だが、スーパーの鮮魚売り場には鮎が並んでいる。「オレを食うのか」と言いたげな鮎の目を見ると少したじろぐが鮎の旨さには負ける。▲鮎に舌鼓をうっているうちに街では祇園囃子が響き渡っている。となればハモである。これも食さねば。地球環境の変化でこうした幸せがいつまで続くか心もとないが、今は四季の変化を味わいたい。

連載 ふみの道草（73）　山椒魚

前回に続けて、川柳をよく詠む人は、また川柳をどのようによく読んでいるかを紹介したい。

綺羅星　千代子

二死満塁ちょうどその時ホームラン　秋子

思わずバンザイと言ってしまいそうだった。句姿の違う六句各々が生きる姿勢を語り、会ったことのない作者の姿が浮かんだ。

楢山へ日に一本のバス乗り場　みちる

楢山行きのバスが日に一本あれば、乗ろうと乗るまいといいなとふと思った。乗りたいと思った時に乗れるバス。思い掛けない知人と会うかもしれない。淋しい句であり、取りようで楽しい句である。奇妙な空間に誘われた。

残業で稼いだ昭和懐かしい　邦弘

昭和で生きた私達は、薄暗い時代であったかもしれないが、一生懸命に生きた昭和でもある。唯懐かしい時代。残業で稼いだ頃は若かった。振り向けば私達には昭和がある。

合掌に雑念が入りやり直す　春子

作者の生きている、生きようとする姿勢、合掌の両の手が語る無心なあなた。合掌をやり直すあなた。それを一句にしたあなたに唯敬意。

ひとつ結び握る毛束の細りゆく　幸子

老いは忍ぶ。実感句そのもの。若かったあの頃の毛束の感触が蘇る。神さまは公平。マイナスにはプラス、毛束は細くなったけれど、老いの知恵を神から頂き生きている。

起きるのも寝るのも迷う午前五時　幸

午前五時、一瞬の迷いは起きるに早い。寝ると寝過ごしてしまいそうだ。一瞬の迷いを一句にして一日は始まる。

花吹雪モダンマダムの裾飾る　寿子

春になると、春の句が多くなる。モダンマダムの裾を飾る花吹雪とは洒落ている。読ませる力を持っている。

課題吟「みどり」　信雄

特選

新緑を呑みこむような大欠伸　幸

先ずこの句の発想、つまり「見付け」が素晴らしいと思いました。他の句は、緑地・草・森・緑児などから受ける感性を詠んであったのに対して、新緑に対して、大欠伸をするのですから度肝を抜かれました。

しかし、実感句かもしれません。時あたかも新緑の季節で、春たけなわです。こんな日の昼下がり、退屈して眠くなり、大きな口を開けて欠伸をしたくなるのは当然だと思います。悲しくもないのに涙まで出てきます。さあ欠伸をして脳が活性化されました。作句のチャンスです。秀作ができますよ。

軸吟（選者がその課題で詠んだ自句）

緑陰の鳩の一羽と車椅子　信雄

この時、私が詠んで入選した二句は次のとおりであった。

みどり児の心のままで生きられぬ

緑風に硝煙混じるウクライナ

紫陽花

大賀蓮の花

京都府立植物園にて